

過渡期の經濟法則の考察(二)

山 本 二 三 丸

四

スターリンの労作、『ソ連邦における社会主義的經濟的諸問題』のなかで、重大な問題をふくんでいると考えられるものの一つとして、「價值法則」に關する所論があげられる。この労作の「三」は「價值法則」の問題にあてられているが、それはつぎのような叙述ではじめられている。

「ときどき出る質問は、わが国で、わが社会主義制度のもとでも價值法則が存在しているであろうか、そしてまた作用しているであろうか? ということである。

そうだ、存在しており、そしてまた作用している (действует)。商品と商品生産とがあるところには、價值法則もないわけにはいかないのである」。

このように、スターリンは、ソ連邦「社会主義」国における「価値法則」の存在理由を、「商品と商品生産」の存在に帰着させている。そして、この考え方にしたがって、彼は、その「三」のまえの「二」で、あらかじめ「商品生産」の存在を説明している。そこで、われわれも、「価値法則」にかんするスターリンの所論を検討するまえに、彼がその「二」で「商品生産」についてどのような説明をあたえているかということを検討しておく必要があるのである。

「社会主義のもとでの商品生産の問題」と題された「二」の冒頭で、スターリンはまず、「若干の同志たち」が、エンゲルスの『反デューリング論』のなかの周知の言葉——「生産手段が社会によって掌握されとともに、商品生産が除去され、それと同時に、生産者にたいする生産物の支配も除去される。」——をよりどころとして、「党が権力をとり、生産手段を国有化したのちに、商品生産を保存したのは、ただしくない行動であった」と主張していることをとりあげて、その主張がエンゲルスの言葉の誤った理解にもとづいたもので完全にまちがいだとして、つぎのように論じる。すなわち、エンゲルスが述べているのは、「すべての生産手段の国有化」がおこなわれうる国であって、それは、たとえばイギリスのように、「資本主義と生産の集積とが、工業だけでなく農業でも十分に発展している」国々にだけ妥当しうるものであって、「工業における資本主義の発展は十分であるが、農業では中小生産者としての所有者が数多く存在している」国々には妥当しえないものだ、と。では、エンゲルスの定式の妥当しない後者の国々ではどうなのか？ が問題となってくるが、スターリンは、ここでつぎのような「問題提起」をおこなっている。

「では、もしすべての生産手段ではなく、生産手段の一部分だけが社会化され⁽¹⁰⁾ており、しかもプロレタリアートが権力をとるのに有利な諸条件が現にある場合には、——プロレタリアートは権力をとるべきであろうか、そしてそのの

ちにすぐさま商品生産を廃絶することが必要であろうか？」（ゴシック体―スターリン、傍点―山本）。

(10) この「生産手段の一部分が社会化されている」という言葉は、問題なしとしない。「生産手段の社会化」は、「生産の社会化」と同じく、高度に発達した資本主義的帝国主義国にもみられるからである。ここは、厳密に「生産手段を社会的所有にうつすこと」といわなければならない。なお、「生産手段の一部分」、つまり「工業における生産手段」が社会的所有にうつされているのに、まだプロレタリアートが権力を掌握しておわっていない、といったような事態を問題にすることは、そのこと自体、すぐあとで彼が援用しているレーニンの「解答」を読むまでもなく、論理的にみてすら、ひとつの撞着を示すものといわざるをえない。

これにたいして、スターリンは、「なまはんなマルクス主義者」の二種類の考え方をあげる。「権力掌握を断念して、数千万の中小生産者の零落、雇傭化、農業における生産手段の集積完了をまって、しかるのちはじめて、プロレタリアートによる権力奪取とすべての生産手段の社会化という問題を提起する」という考え方と、「権力は掌握すべきであり、また農村における中小生産者の収奪、彼らの生産手段の社会化をもおこなうべきだ」という考え方である。この二つが全く誤っていることを説明したあと、彼は、レーニンの労作のなかから、右の問題への「正しい解答」をとりだしてくる。

(11) 彼はここで、「この問題にたいする回答は、レーニンが、『食糧税』にかんする彼の諸労作と、彼の有名な『協同組合計画』とのなかで、あたえた」と述べている。だが、これらのレーニンの労作が書かれたのは、一九二一年、ようやく国内戦がおわり戦後復興^{ネップ}新経済政策のはじまった時期のことである。それは、一九五一年「社会主義完成」期とはかけはなれた諸条件のもとにあったのである。

「(a) プロレタリアートは、幾千万の個人的生産者の零落をまたず、有利な条件をのがさず、権力をとるべきである。」

(b) 工業における生産手段を収奪して、全人民の資産にひきわたす。

(c) 中小の個人的生産者をしだいに生産協同組合に、すなわち大規模な農業企業に、コルホーズに、統合する。

(d) 工業を発展させ、コルホーズに大規模生産の現代的な技術的基礎をそなえつけてやり、コルホーズを収奪せず、反対に、これに第一級のトラクターやその他の機械を大々的に供給する。

(e) 都市と農村、工業と農業を経済的に結合するために、農民のうけいれる唯一の、都市との結合形態としての、商品生産(売買を通じての交換)を、ある期間だけ保存し、あらゆる資本家を商品取引から駆逐しながら、ソヴェト商業を、すなわち国営商業と協同組合コルホーズ商業とを、全力をあげて展開させる」(ゴシック体―スターリン、傍点―山本)。

ここに示されたレーニンの「解答」が一九二〇年当時の情勢のもとで唯一の正しい道であったことは、疑いをいれない。それゆえにスターリンも、

「わが社会主義建設の歴史は、レーニンによってえがきだされたこの発展の道が、その正しさを証明したことを、示している。

多少でも数多くの中小生産者の階級をもつすべての資本主義諸国にとっては、この発展の道が、社会主義の勝利のために唯一の可能でまた目的になかったものであることは、疑いの余地がない。」(傍点―山本)

と述べているのである。だが、ここで注意する必要があるのは、このスターリンの言葉のなかでわたくしが傍点をつけたところである。それは、レーニンの示した道が「社会主義が勝利するまで」の歴史的時期にとって正しいものだ、と言っている。だが、スターリンは、一九三六年に「社会主義の建設」は完了し「社会主義の勝利」はすでに達

成されたと言明している。だから、一九三六年からさらに十五年もたった「完全な社会主義」国において、なぜ「商品と商品生産」が存在するかということの「根拠」としてレーニンの「解答」を当てるとすれば、これはあきらかに非弁証法的な論法といわざるをえない。残念ながら、一九五一年現在の「商品と商品生産」の存在の「根拠」としては、スターリンはレーニンの「解答」を示しただけで、もはやこの問題をとりあげることをやめ、かえってそれと反対に、「社会主義のもとでの商品生産」をば与えられたものとして前提したうえで、その「商品生産」が「資本主義を生みだすもの」ではなく「社会主義のためになるもの」だということの「論証」につとめているのである。こういう議論の運び方は意図的というほかないが、その「論証」にしても問題がないとはいえない。スターリンがよく援用する独特の論法を玩味する便宜も考えて、彼が並べている三つのパラグラフを引用して、見てみよう(イ、ロ、ハは山本がつけたもの)。

(イ)「商品生産はやはり、どんな条件のもとでも、資本主義に導くはずだし、また必ず導くだろう、といわれている。これは正しくない。いつでも、またどんな条件のもとでも、そうなるわけではない！商品生産を資本主義的生産と同一視してはならない。これらは二つのちがった事柄である。資本主義的生産は商品生産の最高の形態である。商品生産が資本主義に導くのは、つぎの場合だけである。すなわち、生産手段の私的所有が存在している場合、労働力が商品として市場にあらわれ、それを資本家がつて生産過程で搾取することができる場合、いたがつて(？)国内に資本家による賃銀労働者の搾取の制度が存在する場合、である。資本主義的生産は、生産手段が私人の手に集中され、そして生産手段を奪われた労働者たちが自分の労働力を商品として売り渡すことをよぎなくされているところ、はじまるのである。これがなければ、資本主義的生産はない」(ゴシック体―スターリン、傍点および(？)―山本)。

(ロ)「では、商品生産を資本主義的生産に転化するこれらの諸条件がなければ、生産手段がもはや私的所有ではなくて社会主義的所有(!?)となっていれば、賃労働の制度が存在せず、また労働力がもはや商品とならなければ、搾取の制度(!?)がすではやくから一掃されていけば、そういう場合には、どうであろうか、商品生産がやはり資本主義に導くであろうと考えることができるか? いや、そう考えることはできない。ところで、われわれの社会は、まさに、生産手段の私的所有も、賃労働制度も、搾取制度(!?)も、すでに早くから存在していないような社会ではないか」(傍点および(!?)—山本)。

(イ)「商品生産を、周囲の経済的諸条件に依存することのない、ある自足的なものとみてはならない。商品生産は資本主義的生産よりも古い。商品生産は、奴隷所有者の制度のもとで存在して、これに奉仕していたが、しかし資本主義に導くことはなかった。商品生産は、封建制度のもとで存在してこれに奉仕していたが、しかし、資本主義的生産のための若干の諸条件を準備していたにもかかわらず、資本主義に導くことはなかった。そこで質問がおこる。商品生産がわが国では、資本主義的諸条件のもとでのようには、無制限にまたすべてを包含するほどにはひろがっていないこと、商品生産がわが国では、生産手段の社会的所有、賃労働制度の一掃、搾取制度の一掃というような決定的な(!?)諸条件のおかげで、嚴重な桎梏(!?)のなかにはめられていることを念頭におくならば、商品生産が資本主義に導くことなしに、やはりわが社会主義のためにも一定期間奉仕する(ограничить)ことがなぜできないか? というのである」(傍点および(!?)—山本)。

ここに示されている「論証」は、はたして当をえたものであるか、よく検討してみよう。
まず、(イ)について。

1 「商品生産は、どんな条件のもとでも、資本主義に導くことはない」という主張は、理論的にみてきわめて問題あるものといわざるをえない。なぜならば、「商品生産」そのものがすでに、「どんな条件のもとでも」あるのではなく、一定の条件のもとでしか、つまり生産手段の私的所有のもとでしか存在しえないからである。「商品生産」は、私的所有という歴史的な生産関係に規定された法則として生まれ、そして必然的に発展をとげるのである。

2 「商品生産を資本主義的生産と同一視してはならない。これらは二つのちがった事柄である。資本主義的生産は商品生産の最高の形態である」という主張も、残念ながら、論者の非弁証法的・形而上学的な考え方を示すものといわざるをえない。「商品生産の最高の形態」という論者自身の文章が明示しているように、「商品生産」と「資本主義的生産」とは、けっして「二つのちがった事柄」ではなく、むしろ、緊密に結びついたものであり、「同一のもの」なのである。右の主張を、マルクス主義的見地からみて首肯できるものとするためには、はじめの「商品生産」は当然に「単純商品生産」に書き改めるべきであるが、しかしそのように「訂正」したとしても、「二つのちがった事柄」という、形而上学的見地を示す言葉は誤りである。「単純商品生産」は必然的に発展して「資本主義的商品生産」に転化するからであり、しかも、「資本主義的商品生産」は「単純商品生産」とならんで、これを「基盤」としてのみ、存在しうるからである。

3 「商品生産が資本主義に導くのはつぎの場合だけ」だとして列挙されている「限定」も、同じように論者の非弁証法的・形而上学的考え方を示すものといわざるをえない。

「生産手段の私的所有が存在している場合」——「私的所有」がなければ「商品生産」そのものが存在しないのであるから、この「場合」というのは残念ながら、まったく無意味といわざるをえない。加えて、「私的所有」だけで

は「資本主義」は生まれるものでなく、「商品生産」そのものが必然的に発展し、その一定の発展段階において「資本主義」が必然的に生みだされるという発展法則に照らしてみても、右の主張はとうてい支持されえない。

「労働力が商品として市場にあらわれ、それを資本家が買って生産過程で搾取することができる場合」、「国内に資本家による賃銀労働者の搾取の制度が存在する場合」、「生産手段が私人の手に集中され、そして生産手段を奪われた労働者たちが自分の労働力を売りわたすことをよぎなくされているところ」——これらは、表現に多少のちがいがいこそあれ、みな同じひとつのことを、つまり、資本主義の生産関係がすでに存在し、資本による賃銀労働者からの剰余価値の搾取がおこなわれている場合を指している。だから、これらの「場合」に「資本主義的生産ははじめて生まれる」という主張は、典型的なトウトロギーにすぎない。——曰く、「すでに資本主義がりっぱに存在し、労働者の搾取がおこなわれている場合にかぎって、商品生産は資本主義に導くことができる」。だが、ここにはたんなるトウトロギーとして片づけられない問題がある。それは、スターリンが「労働力が商品として市場にあらわれる」場合とか、「搾取の制度」とかにつよくこだわっている点である。「労働力が商品として市場にあらわれる」ということは、すでに資本主義的生産が相当程度に発展して国内市場を支配しており、労働市場がすでに形成されていることを示ものである。だから、こうした場合にかぎって「資本主義的生産ははじまる」というのは、まさに典型的な歴史的時代錯誤でしかないが、なおそれ以上に、それは、論者が「資本主義の生成」についての歴史的・理論的知識に欠けていることを端的に物語っている。「商品生産」と「貨幣流通」がある程度の発展をとげれば、そこでの社会制度がどのようであれ、直接的生産者は「賃銀労働者」という姿をとることなしに賃銀のために雇傭される労働者となり、貨幣と生産手段を握っている者は、「資本家」という姿をとることなしに、賃銀を出して直接的生産者を雇傭し搾取する

ものになる。⁽¹²⁾「労働市場」や「搾取の制度」などができあがるのは、「資本主義的生産」が十分に発達をとげて国内市場を完全に支配するようになったときのことである。

(12) これは、マルクスによって明らかにされた「資本主義生成」の法則の基本をなすものである。レーニンの名著『ロシアにおける資本主義の発展』はこの法則をみごとに実証したものであるが、いったい、右のような「場合」を条件としてかけられる論者は、この名著の最初の一ページでも読んだものであろうか!?

(4)の内容が、前後転倒した時代錯誤的トウトロギーにすぎないのであるから、これにもとづいて同様の「条件」を柱にした(4)の主張がまったく同じ性質のトウトロギーにほかならないことは、容易にわかる。それは要するに、「資本主義制度」がなければ、商品生産は資本主義を生みださない」という、無意味なくりかえしにすぎない。ただし、厳密にいうならば、そこには転倒したトウトロギー以上の問題点が見出される。ひとつは、「生産手段がもはや私的所
有ではなくて、社会主義的所有となっていれば」という個所である。「社会主義的所有」というのは、いったい、どういう所有形態を指すのか、それは「社会的所有」と同じなのか、それともちがうのか? 一九五一年はおろか、「発達した社会主義」との看板をかかげた今日でも、コルホーズ農民は自留地という「私有」地をもち、私的生産に励んでいる始末である。こうした複雑な所有関係をひとまとめにして「社会主義的所有」と呼ぶことは、きわめて非弁証法的であり、意図的独断のそしりを免れない。いまひとつ、たとえ「賃労働制度」や「搾取制度」といった、公認の「制度」がなくとも、そして、「社会主義」を看板にしているところでも、「商品」と「貨幣」が大きな役割をはたすようになっていれば、おのずから、「階級区別」が生まれて発展し、特権支配層による直接的生産者の——さまざまな形態をとった——剰余労働の搾取が、つまり「新しい型」の「資本主義的搾取」が生みだされる可能性は十二

分にあるのである。ひたすら「制度」といった形式に拘泥しているような論者には、「古い型」の資本主義の必然的生成の過程も、「新しい型」の資本主義の必然的生成の過程も、まったくその目に入らないのである。

4 (イ)は、ソ連邦の「商品生産」が「資本主義に導くことなしに、社会主義のために奉仕することができる」ということを根拠づけようとしたものであるが、やはりすくなく問題をもっているといわなければならない。

スターリンは、まず「商品生産を、周囲の経済的諸条件には依存することのない、ある自足的なものとみてはならない」という文章を最初にすえて、ここから、「だから、商品生産は、ひとりだちできず、他の社会制度に依存しなければ存在できず、それに奉仕するものでしかない」という主張を「合理化」しようとしている。だが、この最初の文章が、そもそも、理論的混乱を示すものである。「商品生産」とは、労働生産物の一部分もしくは大部分が「商品形態」をとるというだけのことであるから、これについて「自足的 (самодостаточный)」かどうかを問題にすること自体、誤りである。本来、生産は生産者自身の生存を支えるに必要な生産物を生産することであり、自給自足が、いいかえれば現物経済が生産の本来の姿である。原始共同社会、奴隸制社会、封建制社会は、いずれも現物経済を基本とするものであったのであって、一部の生産物が交換のために生産されたにすぎない。だが、一部とはいえ、労働生産物が「商品」となり、「商品交換」が多少とも増大すれば、そこから「貨幣商品」が必然的に生まれ、これらの「商品」と「貨幣」は、現物経済を徐々につきくずし、当該社会経済体制の崩壊を促進しないではおかない。資本主義以前の三つの歴史的な経済的社会構成体が必然的に崩壊したのは、主としてそこの生産力と生産関係との矛盾の発展・成熟のためとはいえ、そこに「商品生産」の発展がひとつの重要な要因としてはたらいいたものであることは、否定できない歴史的事実である。

それゆえ、「商品生産」が奴隸制や封建制に奉仕したなどという主張は、まったく見当ちがいの謬論といわざるをえないし、また、「商品生産」がそれぞれの制度のもとで「資本主義に導くことはなかった」などという主張も、理論的にみておよそ程度の低いものといわざるをえない。資本主義が生まれるためには、資本主義的生産関係が、つまり一方の側に労働力しか所有しない「自由な」賃銀労働者の階級と、これにたいして他方の側における生産手段と貨幣の集積をにぎる資本家の階級という基本的関係が確立されなければならないのであるが、この「自由な」賃銀労働者の形成は、直接の人身的または身分的隷属関係を基本とするさきの二つの社会体制の存立そのものとは両立しえないのである。ところで、理論的にみて転倒したものとしか考えられないのは、「商品生産は、封建制度に奉仕していたが、資本主義に導くことはなかった」という主張である。事實はまさに逆であって、「商品生産」の必然的發展は「自由な」賃銀労働者層と資本家層を必然的に生みだし、封建制度そのものの崩壊と資本主義社会の生成をもたらす決定的な要因となっているのである。このことを理解できない者は、『資本論』のどの一ページも読まなかった者といつてよい。

5 右におとらず問題をもっているのは、ソ連邦にかなする主張である。

まず、「商品生産がわが国では、無制限に、またすべてを包含するほどにひろがっていない」という主張は、理論的にみて正しいものといえるだろうか？ 後段でみられるように、「商品生産の作用する範囲は個人的消費の物資にかざられている」と述べているところからみると、スターリンは、「商品形態」をとる生産物は「個人的消費物資」だけであって、「生産手段」に属する生産物はすべて「商品形態」をとらないということを主張していると考えられる。だが、「商品」は「交換」されるがゆえに商品なのであって、交換相手の生産物も商品でなければ「商品交換」

は成りたない。右の主張は、「商品形態」にかんして論者が重大な誤解をもっていることを示唆するものと考えられるが、この点はあとであらためて論究することにしよう。

さきには生産手段が「社会主義的所有」になっていると述べられたが、ここでは「生産手段の社会的所有」とある。これは明らかに事実を曲げるものである。さらに、「賃労働制度」や「搾取制度」が一扫されているから「資本主義に導くことがない」という主張が、理論的にみても実践的にみても、重大な誤りであることは、前段で述べたとおりである。

「商品生産」が「わが社会主義社会のために一定期間奉仕することができる」といった、「合理化」的主張も、簡単には首肯されえない。たとえば、ネップの時期について、レーニンが明らかにしているのは、農民との「商品交換」が止むをえない過渡的方策であること、それが不可避である以上は最大限に活用しなければならないということであった。一九二一年に止むをえないものであったのが、三十年後の「社会主義完成」期にどうして「奉仕するもの」に変わることができたのか？ もし、「商品生産」が「奉仕するもの」として存在するのであれば、われわれはこれをして奉仕させないことも、つまり「廃止する」ことも当然できるはずである。ところが、「奉仕するもの」という主張を正直にうけとった「学者」たちが「社会主義制度がりっぱに確立されたのだから、商品生産を廃止しよう」という、当然の提案を出してくると、これにたいしてスターリンは、前言をひるがえして、「商品生産は不可避で、止むをえないものだ」とたしなめるのである。この点は、またあとでふれることにしよう。

要するに、ソ連邦における「商品生産」の「存在理由」についてのスターリンの説明は、理論的見地からみても、実践的見地からみても、きわめて問題あるものであることがわかる。もっとも「致命的」なことは、唯物史観の見地

に即して「商品生産」を特定の歴史的な生産關係に規定された形態規定として把握することがまったくできず、そのために「商品生産」は特定の生産關係や社会制度にかかわりなく存在しうるものだという、全くの俗物的表象に災いされがちであること、そのために「商品生産」と歴史的生産關係との相互關係をそれらの發展・変化において的確にとらえることができず、形式的な形而上学的推論で事を処すことにおわっている、という点である。

(13) ここでのおのずと想起されるのは、「商品・貨幣・資本の形態は、いかなる生産關係とも關係ないものだ」という、宇野弘蔵氏の典型的な修正主義的主張である。ただし、俗物的改ざん論者たちがって、スターリンが正統派マルクス主義の革命的見地をたたく堅持しようとしていることは、後段でみられるように、彼が「資本」をば資本主義的生産のみに照応する範疇として明確に区別している点からみても、あきらかといえよう。和製修正主義者＝宇野氏の右の改ざんの俗論の実体については、拙稿『経済学における形態規定とはなにか』いわゆる「宇野理論」の性格規定――(一)および(二)――(本誌第二十四卷第二号および第三号所載)で詳細な論究がおこなわれているので、ついて参照されたい。

五

前節でみたように、「生産手段の社会的所有」が確立され「社会主義の完成」をみたのであるから「商品生産」は当然廃止されるべきだという議論が出てくるのは、理の当然である。ところが、スターリンは、この議論を、「わが国で生産手段の社会的所有の支配が確立され、賃労働制度と搾取制度とが一掃されたのちは、商品生産の存在が意味を失ってしまったし、したがって商品生産を除去すべきだろう」と言っているというように表現している。これは、きわめて意図的なすりかえといわざるをえない。彼は、これまでくりかえし、「社会主義的所有」が実現されているとか、「社会的所有」があるとか、明言してきたのである。だが、一見して明らかのように、「生産手段の社会

的所有」と「生産手段の社会的所有の支配」とはまったくちがっている。前者は、社会の生産手段がひとつ残らず、社会的所有に属していることを意味するが、後者は、社会的生産手段の大部分が社会的所有に属するが、他の一部は、これとちがった所有形態にあるということの意味する。なぜ、このようなすりかえが必要になったかといえば、いままで「社会的所有」ひとつで調子よく議論を運んできたが、ここに来て、それとちがった所有形態、つまりコルホーズの形態をどうしてももちださざるをえなくなったからなのである。こうした「便宜的な変更」はマルクス主義者としてはとるべきでないことはもちろんであるが、こうして「書き変えられた」異論を前にして、スターリンが「商品生産」存置の必要を説明し、どういう事態になったならばそれが不必要になるかということ、どんなにうまく説明しているかをみるために、つぎにその全文を引用してみよう。

(4)「現在わが国には、社会主義的生産の二つの基本的形態が存在している。すなわち、国家的——全人民的——形態と、全人民的とは呼べないコルホーズ的形態とである。国家企業では、生産手段と生産物とは全人民的所有となっている。ところが、コルホーズ企業では、生産手段(土地、機械)は国家に所属しているとはいえ、生産物は個々のコルホーズの所有となっている。なぜなら、コルホーズにおける労働は、種子と同じように、自分自身のものである、またコルホーズは、永久使用のためコルホーズに引き渡された土地を、事実上、自分の所有として使用している——これを買ったり、買ったり、賃貸したり、あるいは抵当にいたりすることはできないが——からである。

こういう事情のために、国家が処理できるのは国家企業の生産物だけであるのに、コルホーズの生産物は、コルホーズだけが自分の生産物としてこれを処理する、ということになっている。だが、コルホーズは、自分の生産物を商品としてでなければ、他人の手に引き渡すことを欲せず、これとひきかえにコルホーズに必要な商品をうけとること

を欲している。コルホーズは、現在のところ、商品的結びつき以外の、売買による交換以外の、都市との経済的結びつきは、これをうけいれない。それゆえに、商品生産と商品取引は、わが国では現在のところ、たとえば、ニンが商品取引をできるかぎり展開することが必要だと宣言した三十年まえと同じように必要なのである。」

(四)「もちろん、二つの基本的な生産セクター、国家的セクターとコルホーズ的セクターにかわって、国内のすべての消費物資を処理する権利をもつところの、すべてを包含する一つの生産セクターがあらわれるときには、商品流通とその「貨幣経済」とは、国民経済の不必要な要素として消滅するであろう。しかしこれが無いあいだは、二つの基本的な生産セクターが残っているあいだは、商品生産と商品流通とは、わが国民経済組織のなかの不可欠で、きわめて有用な要素として、ひきつづき有効である。単一の統合されたセクターの創造がいかんしておこなわれるか、それは国家的セクターがコルホーズ的セクターを簡単に吸収するという方法によるのか——これはほとんどありそうもないことである(というのは、これはコルホーズの収奪と受けとられるであろうから)、——あるいはまた、はじめのうちは国内の全消費物資を記帳する権利をもつが、時がたつにつれて、たとえば生産物交換というやり方で全生産物を分配する権利をもつようになるところの、単一の全人民的な経済機関(国营工業とコルホーズからの代表者をもった)を組織するという方法によるのか、——これは、別個の審議を必要とする特別の問題である。」

(五)「したがって、われわれの商品生産は、ふつうの商品生産ではなく、特殊な種類の商品生産、資本家のいない商品生産であって、その関係する商品は、基本的には、統合された社会主義的生産者たち(国家、コルホーズ、協同組合)の諸商品であり、その作用する範囲は個人的消費の物資にかぎられていて、それはあきらかに、資本主義的生産に発展することはできず、その「貨幣経済」とともに、社会主義的生産の発展と強化のために奉仕すること

を、運命づけられているのである」(ゴシック体—スターリン、傍点—山本)。

ごらんのように、(イ)では「商品生産」の存在理由が、(ロ)では「商品生産」の「消滅」の「根拠」が述べられているが、ここにもすくなくらず問題がふくまれているようである。まず、(イ)からみていこう。

1 スターリンは、「社会主義的生産の二つの基本的形態」として、「国家的形態」と「コルホーズ的形態」とをあげている。だが、「社会主義的生産形態」とは、どういうものであるか？ マルクス・レーニンの古典的規定をまつまでもなく、すべての生産手段の社会的所有、労働力の担い手全員による直接的な社会的労働——この二つは社会主義の本質的メルクマールである。だから、「全人民的とは呼べないコルホーズ的形態」をもってきて、これを「社会主義的生産の基本的形態」だというのは、「社会主義」という基本的概念についてのきわめてルーズな濫用といわざるをえない。もし、一九三六年以降のソ連邦を「社会主義社会」だとしておいて、その「社会主義社会」の「基本的生産形態」の一つがコルホーズ的形態であるから、コルホーズ的形態は「社会主義的生産の基本的形態」でなければならないのだ、というように「論拠」づける向きがあるとすれば、これはまた形式論理からみてすら、暴論といわざるをえない。しかも、前言にもかかわらず、スターリンはすぐあとで「コルホーズ的形態」は「社会主義的形態」などではけっしてないということを端的に示す事実をあげているのである。

2 コルホーズ企業について、スターリンは、土地と機械が国家的所有に属すると述べながら、その他の生産手段についてはまったくふれていない。だが、不可欠な生産手段としては、そのほかに、種子、あらゆる種類の農器具と資材、役畜、肥料、等々があり、コルホーズはこれらのものを「自分だけのもの」として排他的に所有している。これは、国家的所有とはちがった、むしろこれに対立する所有形態だといわなければならない。さらに、土地も、ス

ターリン自身認めているように、「永久使用のためコルホーズに引き渡され、事実上、自分の所有として使用している」ものである。こうした排他的占有の關係は、資本主義社会でもっとも急進的な民主主義の方策としての「土地国有化」の実施にともなう農民の使用する土地がその私的占有に属するものとなっている場合と同様のもの——ただし、国家権力即政治体制の本質的差異を別とすれば——であつて、このような農民による排他的占有の形態そのものは、⁽¹⁴⁾ けつして社会主義的なものとはいえないのである。

(14) 資本主義的生産のもとの土地国有の經濟的意義を明確にしているのは、レーニンの有名な労作、『一九〇五—一九〇七年の第一次ロシア革命における社会民主黨の農業綱領』(一九〇八年)である。だが、過渡期においても、「商品生産」および「貨幣流通」の存続しているところでは——国家権力の側からの働きかけを別とすれば——土地国有の經濟的意義は、右の労作でレーニンが指摘しているところと大差ないもの、と考えられるのである。

3 コルホーズが、自分の生産物を排他的に取得し、これを「商品としてでなければ譲渡したがない。これとひきかえに、自分に必要な商品をうけとりたいとのぞんでいる。商品による結びつき以外には、売買を通じての交換以外には、都市との經濟的結びつきをうけいれない」ということは、どういうことを意味するか？ それは、あきらかに、コルホーズ農民が、その点で、私的所有にもとづく私的生産者としての小農民と全く同じ性格をもっている、ということを示すものである。そして、このことは、「商品生産と商品取引は、三十年ほどまゑと同じように必要である」という、スターリン自身の言葉によって、動かしがたく裏書きされている。だが、一九二一年当時の小農民層と一九五一年現在のコルホーズ農民とをこのように同一視するということは、はたして許されることであらうか？ そこには、重大な問題がひそんでいるのではないだろうか？

一九二一年は戦時共產主義から新経済政策^{ネフ}へ移ったときで住民のなかで小農民層が優勢を占めていた時期であるが、一九五一年は「社会主義経済制度の全一的支配」の確立した時期だとされ、スターリン自身、はやくも一九三六年に「ソ連邦国民経済のあらゆる分野」で「根本的变化」が生じ、とくに農民は「まったく新しい、社会主義的農民階級」に変わった、と報告しているのである。⁽¹⁵⁾ この「まったく新しい、社会主義的農民階級」がネップ当時の私的利益追求の私的生産者である小農民層とまったく同じ性格のものだということは、どうしたことであろうか？

(15) 前稿『貨幣の範疇規定について(三)』(本誌第三十一卷第三号、一八四ページ以下) 参照。

労働生産物がある価格をもって売買されるという表面的な現象に眼を奪われて、その「商品形態」の奥にかくされている複雑な生産諸関係を読みとることができず、まったく同じ「商品生産」だとして経済的社会構成体の深刻な発展・変化をぬりつぶしてしまう俗物とちがって、レーニンは、つねに当時の政治経済情勢の的確な分析にもとづき、その発展・変化についての正確な見通しのうえに、「商品生産」のあり方をとらえていたのであって、このことは、たとえばさきにあげた労作、『食糧税について——新経済政策の意義とその諸条件』を一読しさえすれば、ただちに思い知られるのである。⁽¹⁶⁾

(16) 参考までに、そのうちの関連ある個所をひとつだけ、つぎに引用しておく。

「わたくしが一九一八年五月に、わが国の経済にある各種の社会経済組織^{ウクラード}の諸要素(構成部分)を、どのように規定したかを一見していただきたい。家父長的な、すなわち、なかば野蛮なウクラードから社会主義的なウクラードにいたるこれら五つのウクラード全部のこれら五つの段階(または構成部分)のすべてが現存していることについて、反駁することはできないであろう。小農民のな国では、小農民のな、すなわち、一部分は家父長的で小ブルジョア的な「ウクラード」が優勢なことは、自明である。交換がある以上、小経営の発展は、小ブルジョア的な発展であり、資本主義的な発展である。これは争う余地のな

い真理であり、そのうえ、日常の経験と普通人の觀察によつてすら確認される経済学のイロハの真理である。

社会主義的プロレタリアートは、そのような経済的現実と直面して、いったい、どのような政策を實行できるであろうか？ 小農民に穀物や原料と交換に社会主義的大工業の生産物のうちから彼らが必要とするすべてのものをあたえるべきであろうか？ これはもつとも望ましく、もつとも正しい政策であろう、——われわれは、それをはじめてゐる。だが、われわれはすべての生産物をあたえることはできない。それはとうていできないし、またそんなに早くはできないであろう、——すくなくとも、全国電化事業の第一段階なりと完了するまでは、できないであろう。ではどうすればよいか？ 私的な、非国家的な交換のあらゆる発展を、つまり商業の発展、すなわち資本主義の発展——この発展は、何百万という小生産者が存在するときには避けられない——を禁止し、まったく閉ざすように試みるか。そのような政策はばかげたことであり、それを試みようとする党の自殺となるであろう。ばかげたことというのは、この政策が経済的に不可能だからであり、自殺というのは、このような政策を試みる党は必ず破滅するからである。……………

それとも（もつとも可能な、そしてただ一つ合理的な政策としては）資本主義の発展を禁止したり閉ざしたりしようなどとは試みないで、これを国家資本主義の軌道に導くようにつとめるか。これは経済的に可能である。というのは、国家資本主義は、自由な商業の、一般に資本主義の諸要素があるところにはどこにでも——形態と程度の差こそあれ——存在するからである。

ソヴェト国家を、プロレタリアートの独裁を、国家資本主義と組合わせ、結びつけ、並存させることは、可能だろうか？

もちろん可能である。わたくしが一九一八年の五月に証明しようとしたのは、このことであつた。わたくしは、このことを一九一八年の五月に証明しておいたつもりである。なおそのうえに、当時わたくしは、国家資本主義が、小所有者的な（小家長的でもあり、また小ブルジョア的でもある）自然発生的な状態にくらべて、一步前進であることを証明した。現在の政治的・経済的環境のもとでは、国家資本主義と小ブルジョア的な生産とを必ず比較しなければならぬのに、国家資本主義を社会主義とだけ対置させたり、あるいは比較して、多くの誤りをおかしているのである。

理論的にも実践的にも、全問題は、資本主義の不可避的な（ある程度までは、またある期間）発展を国家資本主義の軌道にむけ、その諸条件をととのえ、近い将来国家資本主義が社会主義へ転化するのを保障する正しい方法を発見するにある」（前出、三二二—三二四ページ、傍点——レーニン、ゴシク体——山本）。

このなかで「一九一八年の五月に証明しておいた」とあるのは、極左的偏向をおかした「共産党左派」を批判したレーニンの労作、『左翼的な見解と小ブルジョア性について』のことを言っている。念のため、その一部分をつぎに引いておこう。

「いま、ロシアではまさに、小ブルジョア的な資本主義が優勢であるが、それからは、大規模な国家資本主義へも、また社会主義へも、同一の道が通じているのであり、「物資の生産と分配にたいする全人民的な記帳と統制」と呼ばれる同一の中間駅を経由して、道が通じているのである。このことを理解していない者は、現実の事実を知らず、現にあるものを見ることができず、真理を正視する力がないか、あるいは、「資本主義」を「社会主義」に抽象的に対置するにとどまって、現在わが国でおこなわれているこの移行の具体的な諸形態と程度とをふかくきわめようとしないうして、許しがたい経済的誤謬をおかしているのである。……………」

ロシアは、国家資本主義にも社会主義にも共通なもの（全人民的な記帳と統制）をとおらずには、現在の経済状態から前進することはできないのであるからこそ、「国家資本主義のほうへの進化」をもちだして、他人をおどかし自分自身をおどかさことは、まったく理論的にばかげたことである。このことは、まさに「進化」の実際の道から思想を「わきへ」そらすこと、この道を理解しないことを意味する。そして実際には、このことは、小所有者の資本主義へひきもとすにひとしいのである」（『全集第四版、第二十七卷、三〇七—三〇八ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本』）。

またもし、「三十年ほど前と同じ」という主張が事実^にに合致した正しいものであるとするならば、つまり、一九五一年現在のコルホーズ農民がもれなく、実際に、「商品としてでなければ他人の手に引き渡すことを欲せず、売買による交換以外の都市に国営工業との経済的結びつきをうけられない」ものであるならば、それは、一九五一年現在のコルホーズ農民が、本質的に、一九二一年当時の小農民とまったく同じ性格のもの、つまり、小ブルジョア的・私的生産者にほかならないこと、両者のちがいは、ただ、前者が個別的・私的生産によって私的利益を追求するのにたいして、後者が集団的・共同的生産を通じて「保証された」私的利益増大を追求するというだけであることを、直接・端的に示すもの^だといわなければならない。そして、客観的に事態をながめるひとにとっては、残念ながら、右の小ブ

ルジョアの・私的生産者という本質的性格が——制度の変化にもかかわらず——きわめて濃厚に残存していることは、争う余地のない事実として、その眼にうつらずにはいないのである。⁽¹⁷⁾ それにもかかわらず、もっぱら形式的な制度を強調して、コルホーズは「社会主義的形態」であるとか、コルホーズ農民は「社会主義的農民階級」であるとか言う者があるとすれば、それは、まさしく觀念論的空語^{フラーゼ}を弄するものとの正当な非難を免れないであろう。

(17) スターリンの後塵を拝しながら「スターリン抹殺」を呼号して権力にありついたフルシチョフとこれをしのぐ「大物」ブレジネフおよびその一党が、「発達した社会主義」だと吹聴し、「共產主義のゴールは目前である」と宣伝これつとめ、その尻馬に乗って国内はもとより世界中の忠実な信奉者たち——例によって「マルクス・レーニン主義」という言葉だけをわけわからずにひけらかしているわが国の「社会主義協会」派の連中にいたるまで——が、「真正社会主義」よとけんめいに絶賛してまわっている当のソ連邦では、一九二一年からなんと半世紀以上もたつた今日でも、あいもかわらず、「社会主義」国营商店では種類も貧弱、品質粗悪な農産物しか売っていないのに、コルホーズ自由市場ではありとあらゆる種類の良質の——ただし高価な！——農産物が山と積まれているという、まことに目ざましい対照が、いたるところで展開されているのである。「中央アジアのタシケントやカスピ海のほとりのバクーから、コルホーズ農民が自留地で生産したトマトやリンゴを、五百キロ、一トンと飛行機(!!)や汽車に積みこんで、シベリヤやカムチャッカにまで売りにでかけている」とは、またなんとたいした「発達した社会主義」的農民ではあるまいか!! (拙稿『正しい批判はいかにあるべきか——教条主義批判を装った修正主義(六)』——本誌第二十二巻第三号、二六—二九ページ——参照)。

つぎに、(ロ)は、「商品生産」がいかにして「消滅」させられるかという、いわば「商品生産廃棄の方法」についての「見通し」を述べたものであるが、やはり少なからず問題をふくんでいるといわなければならない。

まず、「二つの基本的な生産セクター、国家的セクターとコルホーズ的セクターにかわって、国内のすべての消費物資を処理する権利をもつところの、すべてを包含する一つの生産セクター」とは、いったい、どういうものである

うか? 「生産セクター」であるならば、当然、消費物資のみならず生産手段をも生産し、かつ消費しなければならないのに、つまり、そういう意味で「すべてを包含する」ものでなければならぬのに、ただ「すべての消費物資」だけを「処理する権利」をあたえられているというのは、どういうことであろうか? 生産手段についてはこれを処理する権利をまったくあたえられていない「生産セクター」というのは、どういう「生産セクター」であろうか? (ロ)の後半では、この生産手段を処理する権利のない「単一の統合されたセクター」がどのようにして「創造」されるかについて、「国家的セクターがコルホーズ的セクターをあっさり吸収する」とか、「生産物交換というやり方で生産物を分配する権利をもつ、単一の全人民的な経済機関を組織する」とかいふ、「方法」が述べられている。だが、残念ながら、後者の「機関」は、生産物分配のための機関であつて、「生産セクター」ではありえない。加えて、「全生産物の記帳と統制」は、さきにみたように、すでに一九二一年当時にレーニンが明確に指示しているところであり、これなしには「社会主義経済」ははじめから成り立たないのである。

「国家的セクターがコルホーズ的セクターをあっさり吸収する」といふ言葉が示しているのは、「商品生産廃棄」という重大な問題について、スターリンがたんに制度の改革による解決しか考えていないということ、しかも、その場合、制度についてもまったく形式的・観念的にしかとらえることをせず、それらがどのような複雑な生産関係をそのうちに包蔵しているかということを真剣に把握しようとはしていないということである。肝腎の問題は、表面的な組織や制度をどう改革するかにあるのではなく、まさに「商品生産」を必然的なもの、不可避なものにしている客観的な「根拠」をいかに根本的に正しく「揚棄」するか、ということにあるのである。この点で、われわれが真剣に字ばなければならないのは、さきに前稿で論究したレーニンの労作、『偉大な創意』⁽¹⁸⁾の中の重要な指示である。これを当

面の問題にあてはめていうならば、もっとも重要なことは、第一には、コルホーズの根本的「體質」を、つまりコルホーズ農民の中に根強く残っている小ブルジョアの・私的生産者の性格と習慣を徹底的につくりかえ、社会主義的先進労働者のそれと同じものに改造すること、第二には、おくれた技術的水準の農業を先進的な大工業の水準にひきあげ、社会主義的生産形態につくりかえること、そして、最後に、私的所有のあらゆる残滓を廃止し、都市と農村との区別を廃止し、肉体労働者と精神労働者との区別の廃止の方向をめざして、改革をおしすすめること、である。

(18) 前稿『貨幣の範疇規定について(三)』(本誌第三十一卷第三号、一七七一—一七九ページ) 参照。

なお、右のスターリンの「見通し」が形而上学的・観念論的見方に災いされているということは、重要な意味をもつ二つの言葉——「商品流通」と「生産物交換」——についての無理論的、用い方のうちにもはっきり示されている。

「商品流通」について、彼は、これを簡単に「貨幣を媒介とする商品交換」と考えているようであるが、これは全くの誤りである。それは、社会の存続を支える全生産物——生産手段および生活手段——がすべて商品として、生産部面から貨幣を媒介とする流通部面をへて、しかもそのさいそれらのすべてが絡み合いにおいて変態をとげて、消費部面にうつることを意味するものである。消費物資だけが「商品」となり「生産手段」は「商品」とならないようなところには「商品流通」は——言葉だけでも——成り立たないのである。

「生産物交換」という言葉について、スターリンは、これを、労働生産物が「商品形態」をとらないで「現物形態」のまま「交換」されることだと考えているようである。だが、いったい、「現物形態」だけで、どのようにして「交換」がおこなわれるというのであるか? 一〇〇キロの小麦と一〇〇メートルの綿布とでは、「現物形態」にしていたが、(!!) どうやって「交換比率」をきめるといふのか? 「商品形態」を廃止しておいて「交換」を生かし

ておこうというのは、マルクス経済理論とは全く無縁の、俗物的観念論者の妄想でしかない。さきに注意しておいたように、マルクスは、名著『ゴータ綱領批判』⁽¹⁹⁾のなかで、とくに「交換」についてふれ、「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では、生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは、生産物に支出された労働がこの生産物の価値として、すなわち生産物にそなわった物的特性として現われることもない」(傍点—山本)とはっきり教示しているのである。一步ゆずってかりに、スターリンがこの「生産物交換」という「術語」をレーニンの労作のなかから見つけたものとしても、つまり、レーニンの用語をそのままとりいれたものだとしても、実は、レーニンの意味するところは、スターリンの考えているものとは全くちがっているのである。「商品生産」についてのスターリンの見解をつぎの節で検討するさいにもふれる必要があるので、ここで、レーニンがどういう意味で右の言葉を用いたかを、簡単にみておこう。

(19) 前稿『貨幣の範疇規定について(二)』(本誌第三十一卷第二号、七八ページの注(12)) 参照。

「生産物交換」という用語をレーニンがつかっているのは、「単一の統合された生産セクター」など思いつくことすらできなかった一九二一年のネップの時期である。つぎにその個所を二つほどあげよう。

「われわれの経済建設を全国的規模で成功させる実際の尺度は、いまではなによりもまず二様になっている。第一には、食糧税のすみやかな、完全な、国家的に正しい徴収の成功であり、第二には——しかもそれはとくに重要であるが、——農産物と工業製品との商品交換および生産物交換の成功であり、農工業間の取引の成功である」(全集第四版、第三十二卷、三五六ページ、傍点—山本)。

「これ「農民との商品交換—山本」は、——こんにち重要でありさし迫っているという点で、第一の問題である。第一

に、軍隊と労働者にたいする食糧の完全な、規則的な供給なしには、国家は一般に経済建設をすすめることはできないからであるが、商品交換は、食糧をあつめるための主要な手段とならなければならない。第二に、商品交換は工業と農業との正常な相互関係を検証するものであり、また同様に、多少とも正常に作用する貨幣制度をつくりだすための活動全体の土台でもある。商品交換（生産物交換）をもこれにふくめて。というのは、国家の生産物——すなわち農民の食糧と交換される社会主義工業の生産物は、経済学的な意味での商品ではない、いずれにせよたんなる商品ではなく、もはや商品ではなく、商品であることをやめてしまっているからである（²⁰）の問題にたいして、いまやあらゆる経済会談、あらゆる経済建設機関の主要な注意を向けなければならない」（前出、三六二ページ、傍点およびゴシック体——山本）。

（20）念のため、このゴシック体で示した個所の原文を、つぎに記しておこう。—— не есть товар в политико-экономическом смысле, во всяком случае не только товар, уже не товар, перестает быть товаром.

みられるように、レーニンは、「商品」を経済学的に厳密にとらえ、この「商品」の範疇規定に照らして、「国家の生産物」は「商品」ではなく、「商品」であることをやめたもので、いかなる場合にもたんなる「商品」ではない、と主張している。それは、私的所有のもとでの私的労働の生産物のみが商品として規定されなければならないからである。スターリンは、レーニンのこの厳密な規定の意味がわからず、「価格」をもって売買されるのが「商品交換」であって、そうでないものが「生産物交換」だと思ひこんでいるのである。これは、一方で「商品」の範疇規定についての形而上学的没理解を示すと同時に、他方で「交換」についてのマルクスの理解の欠如を示すものといわざるをえない。なお、ソ連邦の「商品生産」の性格についてのスターリンのとらえ方は、右につづくいで展開

されているので、つぎにこれをみよう。

六

スターリンは、(v)において、ソ連邦の「商品生産」が「普通の商品生産」ではなく、「特別の種類の商品生産」だといっている。それでは、マルクス・レーニンが教示している範疇規定に照らしての「特別の種類の商品生産」かという、そうではなくて、つぎの三点をあげて「特別の種類」だというのである。

(i)「資本家のいない商品生産」——残念ながら、「資本家のいない商品生産」は、資本主義社会にも、またそれ以前の社会にもりっぱに存在した「普通の商品生産」である。直接的生産者が自己の労働力と自己の私有する生産手段とを結合させることで成り立っている「本来的」もしくは「単純な」商品生産が、それである。

(ii)「その関係する商品が、基本的には、統合された社会主義的生産者たち(国家、コルホーズ、協同組合)の諸商品であること」——まず「基本的には」という限定は、これらの「社会主義的生産者たち」の手によらない生産物Ⅱ「商品」が相当量存在していることを示すものといわざるをえない。これは、おそらく、真正正銘の個別的・私的生産者による私的生産物とおもわれるが、この純然たる「商品生産」の存在は、直接「社会主義」と相容れないものである。つぎに、「国家」は別として、コルホーズと協同組合をひとからげにして「社会主義的生産者たち」としてゐるのは、形式にとらわれた独断である。これらが真に「社会主義的」なものでないからこそ、「商品生産」が問題とならざるをえないのである。

(iii)「その作用する範囲が個人的消費の物資に限られていて、資本主義的生産に発展することはけっしてできない

こと」——「その作用する範圍」という言葉はまことに奇妙であるが、おそらく、「商品」として売買されるのは、「個人的消費の物資にかぎられる」ということであろう。だが、そうだとすれば、第一に「商品流通」という言葉は宙に浮くことになる。第二に、コルホーズの生産する各種の原料Ⅱ生産手段、たとえば、棉花とか亜麻は、「商品」として売られるのではないとすれば、どうして加工工業の手に入るのか？ また、コルホーズが都市Ⅱ工業から入手しなければならぬ農器具とかあらゆる資材は、「商品」として買入れるのでなくて、無料で配給されるというのであるか？

ところで、「生産手段は商品ではない」という主張は、スターリンの同じ労作の中にある『同志、アレクサンデル・イリイチ・ハイトキンへの回答』においてもくりかえし強調されているので、その個所をつぎにかけて検討してみよう。

「わが社会主義制度のもとで、生産手段を商品と見ることができだろうか？ 私の考えでは、けっしてそう見ることとはできない。

商品とは、任意の購買者に売りわたされる生産物であり、しかも商品の販売にあたっては、商品の所有者はその商品にたいする所有権を失い、購買者が商品の所有者となつて、彼は、それを転売したり(!!)、担保にいれたり(!!)、くさらせたり(!!)することができる。生産手段はこのような規定にあてはまるだろうか？ あてはまらないことはあきらかである。第一に、生産手段は、どんな購買者にも「売りわたされ」はしない。それらはコルホーズにさえ「売りわたされる」のではない。それらは、国家によってその諸企業のあいだに分配されるだけ(!!)である。第二に、生産手段の所有者である国家は、生産手段をあれこれの企業に引き渡すとき、生産手段にたいする所有権を失うところ

か、逆にその所有権を完全に保持している(?)。第三に、国家から生産手段を受けとった企業長は、生産手段の所有者にはならないばかりか、逆に国家によって指示された計画にしたがって生産手段を利用するうえでの、ソヴェト国家の全権として、確認されているのである。

これで明らかのように、わが制度のもとでは、生産手段を商品の範疇に入れることは、けっしてできないのである。

それでは、生産手段の価値だとか、それらの価格だとか、などというのはなぜか？

それは二つの理由による。

第一に、それは、計算のために、決算のために、諸企業の収益状態や欠損状態を算定するために、諸企業の点検と統制とのために、必要なのである。しかし、これはすべて、問題の形式的な側面にすぎない。

第二に、それは、外国貿易にとって、生産手段を諸外国に販売する仕事をおこなうために、必要なのである。ここでは、つまり外国貿易の領域では、しかもこの領域でだけ、われわれの生産手段は実際に商品となるのであり、それは実際に売り渡される(括弧なしで)。

このようにして、外国貿易の取引の領域では、わが国の諸企業によって生産される生産手段は、本質的にも形式的にも(?)商品としての諸特質を保持しているのであるが、一方国内の経済取引の領域では、生産手段は商品としての諸特質を失い、商品たることをやめて、価値法則の作用範囲のそとに出てしまい(?)、ただ商品としての外皮だけ(?)を保持しているのだ(計算、その他)、ということになる」(ゴシック体—スターリン、傍点および(?)—山本)。

ここに述べられている「商品」の規定は、はたして、マルクス経済理論にただしくそっているものであるか、それ

とも、これと正反対の、皮相な現象にひきずりまわされる俗物の見地に立つてのものであるか？ 答は、いわずして明らかである。「商品にたいする所有権を失わない」とか、「転売したり、担保にいられたり、くざらせたりすることができる」などという「説明」は、まさに噴飯ものである。「国家の生産物」は——生産手段であれ、生活手段であれ——経済学的な意味での商品ではありえないという明確なレーニンの教示とは正反対に、生産手段と消費物資との自然的形態の差異や「売り渡し方」の差異といった現象にばかり注目しているのは、まぎれもないマルクス経済理論の放棄であり、俗物的觀念論への執着を示すものである。スターリンの右の議論が理論的にみてまったくお粗末なものであることは、消費物資の生産には生産手段が不可欠であるという、再生産論のイロハを想起するだけでも、明瞭である。

さらに、「生産手段の価値」という、スターリン自身の言葉が示しているように、ここにはマルクスの確立した価値概念の欠如も、明白に露呈されている。「商品」でないものが「価値」をもつとは、いったい、どういうことだろうか!? 彼は、「計算のために」という「理由づけ」をあげているが、これは、生産手段が「商品」であるからこそ、「計算」が必要になるのであって、たんなる「形式」の問題ではない。外国貿易の問題をもちだしてくる論法も、まったく「商品」の形態規定とはかわりないものであって、むしろ詭弁を弄するものとのそしりを免れえないし、「価値法則の作用範囲のそとに出る」などという言葉は、あとで見ると、「価値法則」そのものについての完全な無理解を示すだけのものである。

ところが、ノートキンが、「コルホーズの生産した棉花、亜麻、羊毛、その他の農産原料」は「生産手段」ではないかと言って反論すると、スターリンは、つぎのような論法をつかって、この異論を言葉たくみにしりぞけるのである。

る。

「まず第一に注意すべきことは、この場合農業が生産するのは、「生産諸手段」ではなくて、生産諸手段の一つである原料だけだ、ということである。」「生産諸手段 (средства производства)」という言葉を弄んではいけない。マルクス主義者が生産諸手段の生産というときには、彼らは、まず第一に生産諸用具 (орудия производства) の生産を念頭においている。すなわち、マルクスが「その総体は」「ある特定の社会的生産時代の決定的特徴」をなすところの「生産の筋骨系統と名づける機械的労働手段」と呼んだものがそれである。生産諸手段の一部分(原料)と生産諸用具をふくめての生産諸手段とを同列におくことは、マルクス主義にそむくことを意味する。というのは、マルクス主義は、生産諸用具がその他の生産諸手段にくらべて決定的な役割をもっているということから出発しているからである。だれでも知っているように、たとえばある種類の原料は生産諸用具を生産するための材料として必要だとしても、原料そのものとしては生産諸用具を生産する(!?)ことはできない(!?)。ところが、いかなる原料も、生産諸用具がないことには生産されないのである。」(傍点および(!?)—山本)。

スターリンが、「商品」の範疇に入るのは個人的消費物資だけだと主張するからこそ、それでは、コルホーズの生産する各種原料は生産手段として「商品」ではないものになるのかという、当然の反論が出てくるのであって、残念ながら、この反論のほうが、マルクス経済理論にたたくそっているといわざるをえない。なぜならば、原料は、いうまでもなく、個人的消費の対象ではありえず、文字どおり生産手段にはかならないからである。「原料そのものとしては生産諸用具を生産することはできない」とか、「いかなる原料も、生産諸用具がないことには生産されえない」とかいうことは、たんに原料が、生産手段として、生産諸用具とはことなつた自然的形態をもっていることを示すだ

けであつて、当面の「商品形態」をもつかどうかという問題とは、いささかもかわりはない。こういう自然的形態についてのちがいをもちだして、原料がまぎれもない生産手段であることを否定することによって、それが「商品形態」をもつことを否認しようとする論法は、残念ながら、マルクス経済理論と無縁の、完全な詭弁といわざるをえない。

もし、スターリンが、さきにコルホーズの生産物が「商品」とならざるをえないことの理由として述べたことが、すなわち、「コルホーズは、自分の生産物を商品としてでなければ、譲渡したがない。そして、コルホーズは、これとひきかえに、コルホーズに必要な商品をうけとりたいとのぞんでいる。現在のところ、コルホーズは、商品による結びつき以外には、売買を通じての交換以外には、都市との経済的結びつきをうけいれない」という主張が正しいとするのであれば、コルホーズの生産する農産物₁₁原料は当然に「商品」でなければならぬし、コルホーズの手に入れるいっさいの原料や資材は——たとえば、スターリンのように、「生産の筋骨系統と名づける機械的労働手段」を除くとしても——当然に「商品」でなければならぬはずである。

スターリンは、外国貿易をもちだして、外国貿易の取引の領域では、生産諸手段は本質的にも形式的^(?)にも、商品であるが、国内の経済取引の領域では、商品ではなくなり、「価値法則の作用範囲のそとに出してしまい、ただ商品としての外皮だけを保持している」と主張している。もし、計算のために生産諸手段が「価値」をもち、「価格」をもつというのであれば、「機械的労働手段」もその他の生産手段も、そのかぎりではなんらの差異もありえない。原料や資材は、本質的にも形式的にも「商品」としての特質を保持しているが、機械的労働手段だけは「商品としての外皮」だけを保持していてもはや「商品」ではないなどという議論は、「商品形態」にかんするマルクスの理論的規定とはおよそ無縁の、形式主義的観念論といわざるをえない。

(21) スターリンは「機械的労働手段」だけが「商品ではなくなり、価値法則の作用範囲のそとに出てしまう」といった、特異の主張をかかげている。つまり、「機械的労働手段」以外の生産諸手段も個人的消費物資もことごとく「価値法則の作用範囲のうちにある」というわけである。こういう主張は、「価値法則」にかんするマルクスの説明を完全に見失ったところのみ成り立つものである。スターリンの「価値法則」論がどんな性質のものかは後段においてとくと見定める必要があるが、一步ゆずって、マルクス価値法則についての完全な没理解をおいて問わないとしても、「価値法則の作用範囲のそとに出ている機械的労働手段」の「価値」が、計算のためとはいえ、どのようにしてとらえられ、計算されるものか？ ということは、どう説明されるであろうか？

スターリンは、生産諸手段＝機械的労働手段が「商品」ではなく、「計算のために」その「外皮」だけ保持しているのだという主張を述べたあと、それだけでは、生産諸手段特別論を納得させるのに十分でないと考えたのであろうか、ひきつづきすぐさま、「このような特性は、なにによって説明したらよいか？」という「問い」を出して、つぎのように「答え」ている。

「問題は、わが社会的条件のもとでは、経済的發展が変革という仕方ではなくて、漸次的な変化という仕方でおきている、ということにある。この場合、古いものは單純にさっぱりと廃止されるのではなくて、その形態だけを保持しながら、その本性を新しいものに適応して変えていくが、また新しいものも、單純に古いものを絶滅するのではなく、古くなく、古いもののなかに浸透し、古いものの形態をこわさないで、それを新しいものの發展のために利用しながら、古いものの本性、その機能を変えていくのである。それは、わが経済取引においては、商品だけでなく、また貨幣や、同じくまた銀行についても、そうなっている。それらは、自分の古い機能を失い、新しい機能をとつつあるが、古い形態を保持しており、その形態が社会主義制度によつて利用されているのである。

もし、形式的な見地から、諸現象の表面におきる諸過程の見地から、問題を取りあつかうならば、わが経済のなかでも資本主義の諸範疇がその妥当性を保持しているかのような、正しくない結論に達するかもしれない。ところが、もし経済的過程の内容とその形態とを、発展の深部の諸過程と表面的な諸現象とを、厳密に区別するマルクス主義的分析によって、問題を取りあつかうならば、——つぎのような唯一の正しい結論に達することができる。すなわち、わが国では、資本主義の古い諸範疇については、主として形態が、外形が保持されているが、本質的には、それら諸範疇は、わが国では、社会主義的国民経済の発展の諸要求に適応して根本的に変化した、というのである」(傍点—山本)。

いったい、ここにあるのは、生産手段—機械的労働手段の「特性」の説明であらうか？　とんでもない、ここには、生産諸手段についての説明はひとつもない。ここにみられるのは、現在ソ連邦に存在する「経済的諸形態」が、たとえ「古くからあるもの」でも、「資本主義的なもの」でも、ひとつのこらず、「社会主義制度によって正しく利用されているもの」であり、ソ連邦の「社会主義的国民経済の発展の諸要求に完全に適応したもの」であり、またそういう方向にりっぱに変化しているものであるという、まったくの現状美化論にほかならない。ここには、「経済的諸形態」についてのマルクス主義的理解は、ひとつとしてみられない。スターリンは、「形式的な見地」から、「諸現象の表面におきる諸過程の見地」から問題をとりあつかうことをいましめている。だが、「形式」にとらわれ「諸現象の表面」だけをとりあげているのは、ほかならぬスターリン自身であるといわなければならない。それは、「経済的過程の内容と形態とを、発展の深部の諸過程と表面的な諸現象とを、厳密に区別する」という、彼自身の言葉によって端的に裏書きされている。「内容と形態」とを、「深部の諸過程と表面的な諸現象」とを「区別」するのは、まったく非弁証法的・形而上学的方法であって、「マルクス主義的分析」とは、およそ無縁である。唯物弁証法

的見地は、「形態」または「諸現象」を分析してその奥にかくされている「内容」——本質を把握し、さらにその「内容」——本質、または「發展の深部の諸過程」が、いかにして、必然的にその「形態」または「諸現象」として現われているかを明確にするところに、その真価があるのである。「形態」または「諸現象」と、「内容」または「本質」との関連と相互關係とを弁証法的に把握し明らかにすることこそが、まさしく「マルクス主義的分析」なのである。スターリンがあげている「商品」、「貨幣」および「銀行」についていえば、これらの「形態」が「古い」とか「新しい」とかが問題なのではない。これらの「形態」がその奥にどういう生産關係をかくしているか、それらの生産關係の變化・發展が「諸形態」の變化・發展とどのように結びつき、相互に制約しあっているかを明らかにすることこそが、「マルクス主義的分析」なのである。スターリンは平然として「資本主義の古い諸範疇」などという言葉を用いているが、諸範疇はけっして表面的な形式ではなく、一定の生産諸關係の必然的な物的表現であって、生きた人間の生産諸關係をあらわすものであり、しかも、この生産諸關係を規定するものでもある。資本主義の範疇が存在するということ自体、資本主義的生産關係の残存を表現するものとして、真剣にこの生産諸關係の残存を分析する必要を示しているのであって、このようなマルクス主義的分析の緊要性を見失って、ひたすらこれらの「諸形態」、「諸範疇」が「社会主義制度によって利用されている」とか、「社会主義的国民經濟の發展の諸要求に適應している」とかいった、俗物にふさわしい手前味噌を並べているかぎり、「古い形態」や「古い範疇」の外皮のもとにかくされている「本質」、すなわち「古い生産諸關係」がしだいに「復活」をとげ、ますます「發展」して、「社会主義制度」そのものをもたんなる「形式」に変えてしまうこととならざるをえないのであって、こうした「見通し」は、マルクス・レーニン主義の見地に立つかぎり、否定しがたいのである。

なお、右のような「形態」Ⅱ「範疇」論に関連するものとして、スターリンが二、三の経済的概念について「注意」をあたえている個所があるので、つぎに簡単にこれを見ておこう。

七

さきにみたように、「資本家のいない、特別の種類の商品生産」なるものを論じたあと、スターリンは、そこからつぎの二つの重要な主張をひきだしている。

(イ)「それゆえ、社会主義社会が商品生産形態を一掃しないかぎり、わが国には、商品としての労働力、剰余価値、資本、資本の利潤、平均利潤率などの、資本主義に固有のすべての経済的諸範疇が復活するように言明している同志たちは、全く正しくない。」

(ロ)「そればかりでなく、私は、資本主義の分析をこととしたマルクスの『資本論』からとってこられてわが社会主義的諸関係に人為的によりつけられているその他のいくつかの概念をも捨て去ってしまうことが必要だと考えている。私がとりわけ念頭においているのは、「必要」労働と「剰余」労働、「必要」生産物と「剰余」生産物、「必要」時間と「剰余」時間というような概念である。マルクスが資本主義を分析したのは、労働者階級にたいする搾取の源泉を、剰余価値を説明して、生産手段を奪われている労働者階級に、資本主義を打倒するための精神的武器をあたえるためであった。当然のことながら、マルクスはその場合、資本主義的諸関係に完全に照応している諸概念（諸範疇）を用いている。だが、労働者階級が権力や生産手段を奪われないばかりか、反対に、その手に権力を握っており、生産手段を所有している現在、これらの概念を用いるのは、まったく奇妙なことである。」

ここに盛られた主張は、マルクス経済理論の立場からみて、はたして正しいものといえるであろうか？ 残念ながら、それは、一面では正しいものがあるが、他面では正しくないものをふくんでいるといわざるをえない。

1 スターリンは、そこにあげた経済的概念(範疇)をばきわめて簡単に「資本主義的」なものとするでないものとに分け、「社会主義」社会に「資本主義的」概念はあてはまらない、というように論じている。だが、これは、経済的概念(範疇)についてのきわめて皮相かつ俗物的な、非弁証法的解釈を示すものといわざるをえない。経済的概念(範疇)は、一定の歴史的な生産関係に規定され、これに結びついて——しかもこの場合、物的形態の形をとって——必然的に貫徹する「生産および交換」の法則をあらわすものである。しかも肝要なことは、この概念(範疇)によってあらわされる経済法則の貫徹によって、当の生産関係そのものが発展・変化をとげ、それがまたその経済法則の発展・変化を、したがって概念(範疇)の内容そのものの発展・変化を必然的にもたらすということをただしく把握することである。こうした歴史的生産関係と経済法則＝概念(範疇)の相互関連をそれらの発展・変化において、つまり、ただしく弁証法的に把握し適用するものでなければ、過渡期の経済法則も諸概念(諸範疇)も、したがってまた社会主義建設の発展過程も、けっして十分ただしくとらえられない。もちろん、スターリンの言明しているように、「商品生産」であるから「商品としての労働力、剰余価値、資本、資本の利潤、平均利潤率」といった諸範疇も復活するはずだ、などという議論が全く愚劣な迷論であることは、明白である。だが、もしソ連邦における「商品生産」と「貨幣流通」が、資本主義社会における「商品生産」と「貨幣流通」と、範疇的にみて全く同じものであるとするならば——そしてまた、残念ながらスターリンがしているように、全く同じものだとして右の二概念を用いているのであれば——ソ連邦内部に「階級分裂」が生みだされ、企業に投下されたファンドは「資本」となり、企業支配

人は「資本家」と同じ性格をもって、利潤追求につとめ、平労働者は低賃銀で「搾取」に甘んじ、あるいはすこしでもより高い賃銀を求めて転々と移動するといった、一連の現象が生まれ、発展すること(22)は不可避である。

(22) この意味で、後年修正主義の元祖『フルシチョフが実際に「利潤概念」を復活させたばかりでなく、これを「共産主義到達」のための強力なテコに仕立てたという歴史的事実は、きわめて教訓的といわなければならないのである。このまぎれもない「資本主義的範疇」の、したがってまた「資本主義的諸関係」の、めざましい世紀的「復活」については、あとでみることにしよう。

2 (ロ)の「必要」労働(生産物、時間)と「剰余」労働(生産物、時間)についての主張は、残念ながら、これらの概念についての、皮相な一面的な理解を示すものである。これらは、けっして資本主義社会に固有の概念ではなく、むしろ、一般的には、すべての歴史的社會に共通の經濟法則を示すものと理解されなければならないものである。念のために、『資本論』のなかから、超歴史的概念と歴史的概念とを正しく結びつけてとらえる必要を説明している箇所を、つぎに引用してみよう。

「彼「労働者—山本」の日々の生活手段の価値が、平均して、対象化された六労働時間を表示するとすれば、労働者は、それを生産するためには、平均して日々六時間を労働しなければならぬ。彼が、資本家のためにでなく、自身のために、独立に労働するとしても、彼は、その他の事情が変わらないかぎり、自分の労働力の価値を生産し、それによって、自分自身の維持または、不断の再生産に、必要な生活手段を得るためには、やはり彼は平均して一日のうちの同じ可除部分だけ労働しなければならないであろう。しかし、一労働日のうち彼が労働力の日価値たとえば三シリングを生産する部分では、彼はただ資本家によってすでに支払われた労働力の価値の等価を生産するだけだから、つまり

新たに創造された価値で、ただ前賃可変資本価値を填補するだけだから、この価値生産はたんなる再生産として現われるのである。だから、一労働日のうちこの再生産がおこなわれる部分を私は必要労働時間と名づけ、この時間中に支出される労働を必要労働と名づける。労働者のために必要、⁽²³⁾というのは、彼の労働の社会的形態にかかわりなく必要だからである。資本とその世界とのために必要、⁽²³⁾というのは、労働者の不断の存在は、それらの基礎だからである。

労働過程の第二の期間、すなわち労働者が必要労働の限界をこえて労苦する期間は、彼にとっては労働を、労働力の支出を必要とするにはちがいないが、しかし彼のためにはなんの価値も形成しない。それは、無からの創造の全魅力をもって資本家にほえみかける剰余価値を形成する。労働日のこの部分を私は剰余労働時間と名づけ、また、この時間に支出される労働を剰余労働と名づける。価値一般の認識のためには、価値をたんなる労働時間の凝結として、たんに対象化された労働として把握することが決定的であるように、剰余価値の認識のためには、それをたんなる剰余労働時間の凝結として、たんに対象化された剰余労働として把握することが決定的である。ただ、この剰余労働が直接的生産者から、労働者から取りあげられる形態だけが、いろいろな経済的社会構成体を、たとえば奴隷制の社会を、賃労働の社会から区別するのである」(インスティトゥット版第一巻、二二四—二二五ページ 傍点—山本)。

(23) 念のため、同様の趣旨を明示している個所を、同じく第三巻から引いておこう。

「直接的な食糧生産者たちの労働は、彼ら自身にとっては必要労働と剰余労働に分かれるとはいえず、この労働は、社会に関連しては、食糧の生産だけに要する労働を表示する」(前出、第三巻、六八五ページ、傍点—山本)。

人間労働力は、これを適当に、つまり、それ自身の正常な維持⇨再生産に必要なだけ、支出⇨流動させれば、それ

自身の再生産に必要な生産物（価値）よりも多くの生産物（価値）を生み出すという歴史的な天賦の才能をそなえているものだとしたこと、資本は、まさにこの天賦の才能を「合法的に」利用してそこから無償の剰余価値をひきだすものだということが、——これらのことは、『資本論』ではじめて詳細に、あますところなく解明されているのである。⁽²⁴⁾それゆえ、右にあげた引用が明示しているように、「必要」および「剰余」という言葉は、まず人間労働力の再生産に必要であるものとそれを超過するものとをあらわすものとして基本的にとらえ、そのかぎりではすべての社会に妥当する概念としてまずとらえ、そのうえで、それぞれの特定の歴史的社會においてそれらがいかなる歴史的形態を必然的にとるか、ということ把握しなければならない。超歴史的な社会的自然法則とそれぞれの歴史的社會におけるその特殊な貫徹様式、すなわち歴史的經濟法則との関連を正しくとらえるところにこそ、マルクス經濟理論の本領が存するのである。こうしたマルクス主義的見地に立脚することなしに、ただ一面的に歴史的な形態をとりあげて、それが他の歴史的社會における社会的形態とどのように関連しているかを弁証法的にとらえることを忘れるならば、社会主義社會そのものについての的確な理論的洞察など、とうていおぼつかないのである。⁽²⁵⁾

(24) たとえば、第一巻第四章（インスティトゥット版、一七四—一七五ページ）および第六章（前出、二〇二および二一五ページ）を参照されたい。

(25) スターリンはさきの(四)で、「マルクスが資本主義を分析したのは、労働者階級に、資本主義を打倒するための精神的武器をあたえるためであった」と述べているが、残念ながら、これは、『資本論』についての狭い、一面的な理解を裏書きするものであって、レーニン的理解からほど遠いものといわざるをえない。『資本論』は、プロレタリアートが「資本主義社會の唯一の墓掘人」であるという、その歴史的役割を明らかにしているだけではない。それは、プロレタリアートが、「資本主義社會の唯一の墓掘人」であると同時に、「共産主義社會を創設する唯一の担い手」であることを明らかにしているのである。「共産主義社會の唯一の建設者」であるからこそ、「資本主義社會の唯一の墓掘人」となりうるし、またそうならなければならない

のである。さらにまた、「資本主義を打倒するための精神的武器をあたえるため」というのも、きわめて一面的であるといわざるをえない。『資本論』はたんに「資本主義打倒のための精神的武器をあたえる」だけのものではないし、またそれを主眼とするものでもない。それは、資本主義打倒ののちの、共產主義社会建設の筋道を、その中でプロレタリアートが果すべき歴史的役割との結びつきにおいて、指し示しているのであり、それが眞価を発揮するのは、まさしく打倒後の過渡期において、複雑な階級諸関係を的確にとらえ、経済法則と生産諸関係との関連と相互関連およびそれらの発展・変化の的確な把握にもとづいて創造的建設をおしすすめるときにおいて、である。そしてまた、あらゆる種類の修正主義理論が——その論者の主観的意図のいかんにかかわらず——その実態を暴露することになるのも、まさにこの過渡期においてなのである。

(未完)